「真理は生の道」

ラテン語銘文VERITAS VIA VITAEの文意についての一考察

川　端　康　雄

はじめに

VERITAS VIA VITAE――日本女子大学目白キャンパスの図書館の前を通り過ぎるとき、正面玄関の上にこのラテン語の銘文（モットー）が大文字で記されているのが目に入る。現在の図書館が開館したのは1964年（昭和39年）６月のことで、以来半世紀近くにわたってその言葉が来館者を出迎えてきた。西生田図書館（1990年４月開館）でもやはり入口にその文字が見える。本学の学生や教職員にとってたいへんなじみのある光景であり、キャンパスの日常の一部と化しているがゆえに、ふだんは特に気にもとめないものになっているのかもしれない。この銘文はどういう意味なのだろうか。学生向けの小冊子「図書館のしおり」は、2012（平成24）年度までに配布されていた版では、目次の下にこう記されていた。

日本女子大学図書館（目白キャンパス）正面

> 図書館の正面玄関にこの言葉は掲げられています。VERITASは真理、VITAEは人生、生命を意味するラテン語です。VERITAS VIA VITAE―生を通しての真理―は学内のみならず、学外の方々からも広く意見を募り選ばれました。

「生を通しての真理」――従来これが公式の日本語訳となっていたことは、日本女子大学が毎年受験生向けに出してきた「大学案内」でも確認できる[1)]。しかし、はたしてこの訳（と解釈）でよいのだろうか、というのがこれを見て以来筆者が久しく抱いていた疑問であった。この疑問がいかなるものであるかを説明し、筆者自身の訳と解釈を示すことが本稿の目的である。

1　二つの解釈

「生を通しての真理」が完全な誤訳であると断言するわけではない。そう訳されているのにはそれなりの根拠がある。それはラテン語の初級文法を少しかじった程度でも説明できるものであって、すなわち冒頭の単語は「真理」を意味する女性名詞veritasの単数主格、viaは「道」を意味する女性名詞の単数奪格（発音は「ウィアー」と語尾の母音が長くなる）で、「～という道（方途）によって」（これは「手段・道具」を表す奪格ablative of means or instrumentの用法）、そしてvitaeは「生（人生、生命）」を意味する女性名詞vitaの単数属格（英文法でいえば所有格）と解するならば、そう訳せる。英訳すると“Truth by way of life,”“Truth through life,”あるいは航空便である旨を封筒に記す際の“Via Air Mail”（この場合の英語viaは「～を経て」の意の前置詞。上記のラテン語via単数奪格に由来）という英文もあるのだから、“Truth via Life”と訳してもいいのかもしれない。この解釈の場合、ラテン語文の読み方（古典ラテン語の通常の読み方ということになるが）をカタカナ書きにするならば、「**ウェー**リタース・**ウィ**アー・**ウィー**タエ」となる（太字部分に強勢が置かれる）。

しかしこの一文は別の解釈が可能である。冒頭のveritasは変わりないが、viaを単数主格と解することができる。その場合viaの読み方は「ウィア」と末尾が短母音になり、「**ウェー**リタース・**ウィ**ア・**ウィー**タエ」となる。私見ではむしろそう取ったほうがよい。そうすると、Veritas via vitae（est）と、est（<sum）を補って、

「真理は生の道（である）」

となる。さらにvitaeは単数与格と取ることもできる。それを「利害関係」を示す与格（dative of interest）と見るならば「真理は生にとっての道（である）」となり、属格と解する場合と意味内容はそれほど変わらない。さらに、veritasとviaを同格とみなしたうえで、vitaeを「所有の与格（dative of possession）」と取って、sumと組み合わせると、

「人生には真理という道標（みちしるべ）がある」

と解することも可能だろう。さらに、直説法のestでなく接続法sitを補って、

「真理が生の道となりますように」

と、「願望」あるいは「祈願」を示す一文という解釈もありうる。

2　出所の謎

銘文の出所がわかればこのように解釈で頭を悩ませずに済むのだろうが、この文の出典を探っても古典の名句には行きつかない。ただしこれによく似た文はある。それは新約聖書ヨハネ伝福音書第14章に出てくるイエスの言葉である。その部分を文語訳で引用するとこうだ。

トマス言ふ「主よ、何處(いずこ)にゆき給ふかを知らず、いかでその道を知らんや」イエス彼に言ひ給ふ「われは道なり、真理なり、生命なり、我に由(よ)らでは誰(たれ)にても父の御許(たもと)にいたる者なし。汝等もし我を知りたらば、我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり」

このイエスの言葉の「われは道なり、真理なり、生命なり」はウルガタ聖書（ラテン語訳）では“ego sum via et veritas et vita”（14. 6.）となっている。ここでのvia, veritas, vitaの３語がいずれも単数主格で「われ」（つまりイエス）の補語であることは言うまでもない。

これをふまえたVIA VERITAS VITAであれば、これをモットーにしている高等教育機関や自治体が世界各地に散見される。たとえばスコットランドのグラスゴー大学（1451年創立）がそうで、大学の紋章を見ると下部にその銘が巻物(スクロール)に記されている。他にオクスフォード大学ウィクリフ・ホール（1877年創立）や米国シカゴのセント・ゼイヴィアー［聖ザビエル］大（1846年創立）なども同様である。自治体ではルーマニアのアラド市などがこれを銘に採っている。

本学図書館がVERITAS VIA VITAEを銘として採用した際に、上記のヨハネ伝福音書にちなむ（高等教育機関で前例がいくつもある）VIA VERITAS VITAをふまえていたのかどうか、定かではない。キリスト教の影響があるとはいえ、本学はミッション系ではないからイエスの言葉を銘文とするのは考えにくい。ふまえたとしても、語順を入れ替えてvitaをvitaeにした理由がわからない。あるいはキリスト教との適度な距離を示す身ぶりとしてこれを採ったのかもしれない。銘文の選定は新図書館竣工に先立つ1962～63年頃のことだったようである。そこで次節では、本学に残された資料を頼りに、この銘を採用した経緯などを辿っておきたい。

３　新図書館開館の頃

現在の目白キャンパスの図書館の開館までの経緯を時系列で記しておく。1961（昭和36年）６月23日の創立60周年記念式典において、図書館拡充の計画が正式発表され、1962（昭和37）年９月に「新図書館建設」が理事会にて決定された。1963（昭和38）年７月16日に建設工事に着工、翌64（昭和39）年５月31日に竣工、翌月６月23日に開館式が挙行された。当時の学長は上代タノ第六代学長（在任1956－65年）であり、同学長の「確たる理念に基づき、その［図書館の］実現に結実したもの」であった[2)]。

その1964年６月23日の新図書館開会式での上代学長の挨拶が学園の記録に残されている。そのなかに以下の言葉が見られる。

私はいま、それらの［図書館建設に協力された］皆さまから受けたご恩顧を一々申しあげることはとうていできませんが、ただこれからのち、図書館をごらんいただきます際、最初に皆さまのお目にとまるであろうと思います二つのことを例にとりまして、皆さまに申しあげてみたいと思います。まず図書館周辺の植込みの事ですが、ある本学関係者の夫君が、図書館が落成されますとすぐに、長年、二五年から三〇年かかって大切に育てられていたご自園の中から、適当な樹木を選んで、すぐれた造園師をご自分でさしずして、後でご覧いただきますような趣向の植込みをして、ご寄付いただいたわけでございます。それから次の例を申

しますと、玄関正面に掲げられた標語VERITAS VIA VITAEでございますが、その標語の選定について申し上げます。それは松本建築委員長をはじめ、多くの先生方、また最近再び日本に来られた英国詩人ブランデン先生にまでお考えいただきまして、ほんとうに多くの方々の熱心なご助言を受けて決定した次第であります。これはほんの二つの例を申しあげたに過ぎません。[3)]

このなかで本稿に関わるのはもちろん二つ目の例のほうである。ここでは標語の選定について二人の人物が関わっていたことが証言されている。「松本建築委員長」とあるのは政治学者で国際ジャーナリストとしても活躍した松本重治（1899－1989年）であり、1957（昭和32）年に日本女子大学の理事・評議員に就任し、新図書館の建築委員長として尽力した。もう一人の「ブランデン先生」とは、イギリスの詩人で文芸評論家のエドマンド・チャールズ・ブランデン（Edmund Charles Blunden, 1896-1974）のことである。ブランデンは第一次世界大戦に従軍して西部戦線で過酷な経験をしており、それを踏まえた詩などで英文学史に残る仕事を果たした人物だが、1924（大正13）年に来日して東京帝国大学で英文学を３年間講じて以後、日本との絆を深め、第二次世界大戦後にも日本に滞在している。そうした親日家ということで、松本あるいは他の学内関係者のつてによってブランデンに助言を仰ぐということになったのであろう。

標語の決定については、当時図書館長であった篠崎茂穂（文学部社会福祉学科教授）が1964（昭和39）年７月の『女子大通信』において「名づけ親」と題して随想を寄せている。銘文の選定と語義解釈に関わる貴重な証言と思われるので、いささか長くなるが該当部分の全文を引いておく。

上代学長は建築計画の場合と同様、命名にも学園内外の人々に協力してもらう方針を教授会で発表され、その名は、日本語で、あるいはギリシャ語で、との意見もあったが、ラテン語ですることに決定された。ラテン語を全然知らない私さえも、学長の意のあるところを汲み、ラテン語の辞書と首引きで一応考えてみたが、学長に提出するまでに至らないでいるうちに、すでに決定をみたとのことだったので、そのままにした。その後間もなく発表された名前が新しい図書館の入口に読む

VERITAS VIA VITAE

であるが、〔1964年〕六月四日の木曜会においてこの名づけの親とその意味につき、学長からの発表があった。

学長の発表によれば、内外の多くのかたがたが、図書館の新築計画に協力してくださったように、この命名にあたっても学園内の人々はもちろんのこと、学園外からも多くのかたがたが協力してくださって、ついにこの名前に決定されたとのことである。かく、新図書館の名は一応は合作ということになるわけだが、多分だれかの命名したものが、多くの人々の総意となって決定をみたのであろうことは、だれもが推測するところであろう。

次いで学長は、乞われるままに、この名の意味を説明してくださった。ラテン語のVeritasは真理、Viaは何々による、Vitaeは生命、すなわち、生命による真理ということが直訳となるが、その意味はいろいろに理解されると付言されたので、私は図書館に帰って再びラテン語の辞書をくって見た。

一冊のLatin-Englishの辞典によればVeritasは真理、真実、正義、正しさ等の意味がある。Vitaeには生命、生活様式、一生涯、生活手段等の意味があって、この二字がViaすなわち道または通路という語で結びつけられている一つの表現であると理解したのである。したがって学長が説明されたように、一つの固定した訳語に制約してしまう必要もないのであろう。そこで、私は私なりに次のように理解したらよかろうと思ったのである。

すなわち、図書館というものは、利用者個々の人はもちろん、大学全体としても、生命をかけて真理を探究する場所であるというのであろう。多くの人々が、「図書館こそは、大学という学問をする有機体の心臓だ」と言っているが、このVeritas Via Vitaeという名こそ、わが新図書館の実を表わすものだと知って、この命名をうれしく思った。[4)]

ここで間接的ながら標語についての上代学長の解釈が伝えられている。「Viaは何々による」という説明は、viaを奪格と取る構文解釈であることがわかる。この標語を「一つの固定した訳語に制約してしまう必要もない」と述べたとき、篠崎はおそらく個々の語彙がもつ多層的な含意について言及しているのであって、主格＋奪格＋属格という構文解釈については疑問をもってはいなかったのではないかと推測される。

この標語にふれている他の文章もいくつか見ておきたい。1965（昭和40）年５月の『図書館だより』で当時図書館運営委員長であった大原恭子教授は「新入生に寄せて」でこう述べている。

ラテン語の標語、VERITAS VIA VITAEは、TRUTH IS THE WAY OF LIFE 即ち、真理は生命の道、或いは、真実は人生の道、と解することも出来ましょう。限りなく深い意味を暗示するモットーで、内外の学者の方々にもお世話になって選んだ言葉であります。[5)]

ここでは、先の引用で篠崎の説明と異なり、viaを奪格でなく主格ととらえる解釈となっている。要するに、新図書館開館の初期から、ふたつの構文解釈が共存していることがわかる。

４　和訳「生を通しての真理」の公式化

もっとも、この格言にふれた本学関係者の文章をざっと見たかぎりでは、via＝主格説よりも奪格説が数的には優勢であったようである。1972（昭和47）年の新入生オリエンテーションで、当時の図書館長であった国文学科教授中島斌雄は次のように語ったという。

本学図書館の入口に立ち、頭上を仰ぎみた人は、そこに記された一連の横文字に気づかされたことと思います。あれはラテン語で、こういうふうに書かれてあります。

VERITAS VIA VITAE ギリシャ・ラテンにくわしい方にうかがうと、こういう意味だそうです。「人生は真理なり。」というのが、それです。私は、その頭文字のそれぞれをとって、勝手に「三つのV」と名づけています。〔中略〕

人生の意義というものは、真理を追究するところにある――「人生は真理なり」をこう解釈してはどうでしょうか。人生の本当の意味は、真理を追究してやまない態度や生き方に

よって貫かれる。そこに息づくのだと思います。これは、私の一つの解釈ですが、諸君はどう考えられるのでしょうか。[6)]

「人生は真理なり。」見てのとおりVIAの語は副次的なものとして端折られているわけである。

開館から17年後の1981（昭和56）年に当時図書館長の福田陸太郎教授は『女子大通信』にこう書いている。

VERITASというのは英語でいうとTRUTH「真理」、VIAというのはTHROUGHとかby way ofに置きかえて、「……を通して」と解すれば、VITAEというのはlife「人生」とか「生命」とか、「生」の意ですから、「生を通しての真理」となります。あるいはVIAをwayという名詞とし、次のVITAEを所有格のように解すれば、truth, the way of lifeと言いかえてもいいかもしれません。「生の道なる真理」です。

きわめて簡単な言い方なので、いろんな解釈ができると思いますが、真理と生というものを結びつけている言葉なのです。[7)]

このように二種類の構文解釈が可能であることをよく理解していた福田図書館長であったが、viaを「……を通して」と解して「生を通しての真理」という日本語訳に固定したのが彼自身であったことは、残された証言から明らかである。

日本女子大学の図書館が開館して30年を記念する座談会が1994（平成４）年６月の『日本女子大学図書館だより』に採録されている。そのなかで出席者の一人として福田はこう述べている。

福田〔図書館に関して思い出に残っているのは〕それに図書館の標語ですね。「VERITAS VIA VITAE」の定訳を作ったことも思い出します。「生を通しての真理」としたんです。最近『図書館だより』を見ていましたら、蟻川〔芳子〕先生ですか、ちゃんとその訳をお使いになっています。

田口〔令子〕　この訳はちゃんと守られておりますね。[8)]

これについては図書館が所蔵する資料に次のような手書きのメモが残されている。

58年〔1983年〕２月３日（木）　福田館長が下記のように、訳を定めた。
「生を通しての真理」

Veritas via vitae　ヴェリタス　ヴィア　ヴィタエ
（Truth through life）　　（ラテン語）

生命を通して感得される真理
人生　　〃　実現　〃
人生（経験）によって得られる真理

（英文科　福田陸太郎先生より）

54. 9. 25〔1979年９月25日〕

引用ではなく、あいまいな言葉、

学生の中に矢内原伊作氏に傾倒している者がいて、作った言葉らしいとのこと[9)]

こういう次第で、標語について、異なる解釈が大学のさまざまな場で出されてきたが、1983（昭和58）年に当時の図書館長福田陸太郎教授によって、「生を通しての真理」という訳が公式に定められ、以後大学案内や図書館オリエンテーションなどで、この定訳が使われるようになったというわけである。

５　「定訳」の見直し

このように、日本女子大学図書館の銘文VERITAS VIA VITAEは「生を通しての真理」という訳文が公式化されて、正式にはこれで統一されて現在に至っているが、本稿のはじめに述べたように、「真理は生の道」という解釈が可能であり、むしろこちらのほうが妥当であるという私見を一昨年、島崎恒藏図書館長（家政学部被服学科教授）に伝えたところ、島崎館長は『図書館だより』に「VERITAS VIA VITAEと大学図書館」と題するエッセイを寄稿し、この標語の意味と解釈をめぐるこれまでの議論を概括した。その結びにこうある。

> 本学図書館にこの標語を選定された上代タノ先生は、“VERITAS VIA VITAE”を一つの固定した訳語に制約してしまう必要はない、とのお考えだったようであり、またこの点は各種の資料からも窺い知ることができる。このラテン語の標語は、まさに生と真理の間を結びつける指針であって、極めて簡潔な記述の中に、多くの濃縮された思いが込められた含蓄ある標語と言うことができる。しかし簡略的であり、かつ含蓄ある標語であるからなおさらのこと、これまでの固定した語訳から一歩引いて、もっと自由な気持ちで“VERITAS VIA VITAE”を受け止めることが、大学図書館として、あるいは学園関係者としても求められているのではないかと思っている。[10)]

このようにたいへんバランスの取れた意見が表明されているわけだが、「これまでの固定した語訳から一歩引いて」とあるように、30年来用いられてきた「生を通しての真理」という「定訳」を見直す必要があるという提言がここでなされている。文面は穏やかであるが、従来の図書館の方針と異なる道がはっきりと示されている。

じっさい、2013年度版の「図書館のしおり」では、目次の下に記された銘文の説明文が以下のように修正された。

> 図書館の正面玄関にこの言葉は掲げられています。VERITASは真理、VITAEは人生、生命を意味するラテン語です。VERITAS VIA VITAEは学内のみならず、学外の方々からも広く意見を募り選ばれました。

従来公式の訳文とされていた「生を通しての真理」の文言が削除されており、方針の変更がこのようにじっさいになされていることがわかる。

ただし、従来と同様に、「VERITASは真理、VITAEは人生、生命を意味するラテン語です」と、銘文の３語のうちVERITASとVITAEの意味を説明している一方で、VIAの説明だけは割愛されている。これだとVIAの一語がVERITASとVITAEに比べて副次的な意味をもつという含みがあいかわらず残ってしまう。

おわりに

最後に筆者自身の解釈をもう少し説明しておきたい。長らく公式の訳文とされていた「生を通しての真理」と、「真理は生の道」とではどう違ってくるか。前者の解釈は、真理というものが経験的認識に先立つ先験的（アプリオリ）な概念ではなく、あくまで人生の経験を通して把握されるものであるとする、プラグマティック（実用的・実利的）なモットーになる。それに対して後者は、「真理こそが人生の行路を導いてくれる道標である」とパラフレーズすることができて、相対的な真偽ではなくidealな永遠不変の真理を措定して、それに達することを目標として生の歩みを進めるべしという、理想主義的なモットーということになる。プラグマティズムかアイディアリズムか――大袈裟になるが、そのくらい両者は意味合いが異なってくる。

私見を述べるなら、「生を通しての真理」よりも「真理は生の道」のほうが本学図書館の銘の解釈・訳文としてよりふさわしいように思われる。なるほど、たしかに創立者成瀬仁蔵の教育思想の影響源としてデューイやミードらのプラグマティズムが重要なものとしてあったのは周知の事実で、そちらの面を重んじるなら「生を通しての真理」とするのも頷ける。だが、本学の校風からして、「真理は生の道」の理想主義のほうが上位のより高尚な理念と見るべきではないだろうか。

ラテン語構文としても、「手段・道具」の奪格は前置詞を伴わずに表されるとはいえ、viaをそのように「～を通して」の意で（つまり英語のviaのように）使う用例は少なくとも古典期のラテン語ではあまり見られないように思われるし、おそらく英語のviaの語感に引きずられてなのだろうが、これを奪格と解するのは構文上座りが悪い[11]。やはりviaは主格で、「真理、（それこそまさに）生の（生にとっての）道（である）」と解したほうがすっきりする。

ここまで書いたところで、VERITAS VIA VITAEを家紋に入れている例を発見した。ジェイムズ・フェアベアンが19世紀に著した『イギリス・アイルランドの家紋』所収の「題銘索引」に拠れば、英国の名家ティレル（Tyrrell）家の家紋に記された銘がまさにこれだった。その書物ではラテン語の銘に英語の対訳が付されていて、それを見ると“Truth the way of life”となっている[12]。つまりこれは「真理は生の道」のほうの解釈である。さらにもうひとつ間接証拠を挙げると、英国オクスフォード州バンベリーにあるオーヴァーソープ・プレパラトリー・スクール（私立の初等学校）が学校のモットーとしてこれを採り入れていることがそこのホームページで確認できる。そこでも、ラテン語文に英訳を併記するかたちで“Veritas Via Vitae – Truth, The Way Of Life”と記されている[13]。紙数の都合で割愛するが、ウェッブサイトで語句検索をかけてみると、この銘文を“Truth, the Way of Life”と説明している例が他にもいくつも見つかる。

逆に“Truth through（by way of）Life”と説明している事例はどこにも見当たらない。

かくして、本稿の結論は、すでに述べたことの繰り返しとなるが、ラテン語構文のより自然な取り方からいっても、またそのメッセージの適切性からいっても、VERITAS VIA VITAEを従来のように「生を通しての真理」と訳すよりも、「真理は生の道」という訳文にして表に出したほうが、本学図書館の玄関で私たちを迎えてくれる顔として、より気品があり、より高尚で、より理想的な「顔容（かんばせ）」となるように私には思われる。「固定した語訳から一歩引いて、もっと自由な気持ち」でこの標語を見るのが適切であるというのはたしかにそのとおりだと思うが、公式に日本語訳を示す必要が生じた場合は、「真理は生の道」としておいたほうがよい。そう筆者は確信するものであるが、読者諸賢はどのようにお考えになるだろうか。

＊本稿の執筆に際して島崎恒藏日本女子大学図書館長（家政学部被服学科教授）より大学図書館の歴史に関わる資料をご提供いただくなど、ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。

注

1）『日本女子大学　大学案内2013』（日本女子大学）101頁。
2）『日本女子大学学園事典 創立100年の軌跡』（日本女子大学）2001年、176頁。
3）上代タノ「図書館開館式のあいさつ」『日本女子大学学園史』（日本女子大学）２、504頁。
4）篠崎茂穂「名づけ親」『女子大通信』（日本女子大学）186号、1964年７月１日、30頁。
5）大原恭子「新入生に寄せて」『図書館だより』（日本女子大学）第３号、1965年５月、１頁。
6）中島斌雄「三つのＶ」『図書館だより』（日本女子大学）25号、1972年５月20日、１頁。
7）福田陸太郎「図書館について」『女子大通信』（日本女子大学）388号、1981年５月１日、41頁。
8）『日本女子大学図書館だより』90号、1994年６月23日、4-5頁。
9）日本女子大学図書館所蔵の手書きメモ、1979年８月25日付の図書館印が押されている。メモの上の部分に「58年〔1983年〕２月３日（木）福田館長が下記のように、訳を定めた」と記されているのは1983年になされた追記と思われる。
10）島崎恒蔵「VERITAS VIA VITAEと図書館」『図書館だより』（日本女子大学図書館）第146号、2013年３月５日、２頁。
11）アレンとグリーノウの『新ラテン語文法』によれば、この奪格用法は「ある行為の手段や道具」を示すために用いられる。「手段の奪格」のよくある用法としては「横溢」や「充満」を意味する動詞および形容詞と共に用いる形がある。（例）“*aggere* et *cratibus* fossas explant”（「彼らは土と束柴で塹壕を満たす」カエサル『ガリア戦記』7.86）。また「手段・道具」の奪格はutor（使う）、fruor（享受する）、fungor（執り行う）、potior（獲得する）、vescor（食べる）といった形式所相動詞（およびそれらの複合動詞）と共に使われる（*Allen & Greenough's New Latin Grammar,* §408-409）。『オクスフォード・ラテン語辞典』（*The Oxford Latin Dictionary*）でuia（＝via）の項目を見ると、「8（属格と共に）達成・到達の方途、道」「9 ある目的の達成のための手段、方便」の語義が示され、後者の用例のひとつとして“*ulla uia* aut *ratione* absolui potest?”（「彼がいかなる方途や理由によって放免されることができようか」キケロ「ウェッレス弾劾演説」2.180）を挙げている。古典期のラテン語でviaを「手段」の奪格として用いた例もあることがこれでわかる。しかしながら、VERITAS VIA VITAEのviaを奪格と取った場合、そこにいかなる動詞を補えばよいのだろう。estを補っても意味をなさない。「生を通しての真理」という訳文だとvia vitaeがあたかも形容詞句として名詞veritasを修飾しているかのように受け取れるが、文法上それは無理で、via vitaeは隠れた動詞を修飾する副詞句となり、「真理は生を通して（認識される、顕在化する、等々）」、とest以外の何らかの動

詞を想定しなければならない。viaを奪格と取るのでは「座りが悪い」と私がいうのはこのような事情による。

「英語のviaの語感に引きずられて」と筆者は書いたが、じっさい、「生を通しての真理」の公式訳を定めた福田陸太郎図書館長は英文学科に属し、英語の達人であった。そうであったからこそ、英語のviaの語感がこのラテン語銘文の読み方に影響していたのだと私は推測する。ちなみに、フランス文学専攻で文化学科の斎藤広信教授（現名誉教授）は2010（平成22）年度版の『わたしの大学』（日本女子大学）のなかで、「VERITAS VIA VITAE（生を通しての真理）——含蓄に富む語句であり、その意味をパラフレーズすることは難しいが、これの英訳はTRUTH THE WAY OF LIFE（真理は生命の道／真実は人生の道）となっている」と書いている。フランス文学者であるがゆえに、英語のviaの用例に影響されていないのだと思われる。

12）James Fairbairn, *Fairbairn's Book of Crests of the Families of Great Britain and Ireland*, 2 vols., 4th ed. (London: T. C. & E. C. Jack, 1905), Vol. 1, Part Ⅱ, "(1.) Mottoes," p. 87. 以下のウェッブサイトよりPDF版で確認。アクセス日、2013年10月30日。<http://archive.org/details/fairbairnsbookof01fair>.

13）The Homepage of Overthorpe Preparatory School. アクセス日、2013年10月30日。<http://www.overthorpe-school.co.uk/syllabus.shtml>. 他に、フィリピンのネグロス・オリエンタル州が印章にVERITAS VIA VITAEを銘として採り入れている。<http://www.negor.gov.ph/>. アクセス日、2013年10月30日。